

【研究室だより】

ディスクロージャー研究室

経営ビジネス学科
大洲 裕司

1 はじめに

2023年4月に産業理工学部経営ビジネス学科に着任しました。どうぞよろしくお願ひいたします。2023年度で教員歴が7年目となります。1年目は出身校の大阪市立大学経営学研究所で特任講師として勤め、2年目から6年目までは、青山学院大学社会情報学部の助教として研究・教育に従事しました。経営ビジネス学科への着任を期に、福岡県に住む妻および1歳になる娘と同居をすることができるようになりました。

毎日娘と遊ぶことができ、また、毎週末に家族でお出かけできる環境のありがたさを噛み締めています。これからも、育児・研究・教育に邁進する所存です。以下では、自身の研究領域と教育内容を簡単に紹介します。

2 研究領域

専門分野は財務会計であり、実証的なアプローチを用いて研究をおこなっています。財務会計の実証研究においては、情報の経済学、ファイナンス、あるいは、組織の経済学などを仮説構築の根拠として、企業の会計行動（たとえば、利益が嵩上げされる会計手続きを選択する、あるいは、自社のネガティブな情報を投資家の注意が向かないタイミングを狙って開示するなど）の要因および効果を分析します。自身の現在の研究においては、企業の有価証券報告書を介した経営戦略・ビジネスモデルに関連する情報開示を分析対象としています。このような情報の開示には、企業と投資家との建設的な対話の促進が期待されている一方で、情報開示にともなう機密コスト（自社の機密に関わる情報を開示することによって、競合・株主・従業員などの利害関係者が情報を活用して、自社にダメージを与えうるコスト）の存在を無視できません。情報開示にともなうコストとベネフィットを勘案して、どのような特徴を有する企業が自社の詳細な戦略情報を開示するのか、という点に関心を有しています。

実証的なアプローチということで、分析対象期間によっては数万件におよぶ上場企業の財務データなどを対象に、統計的な手法を適用して仮説を検証するのですが、とくにここで強調したいのが今回の分析対象の特徴です。現在の研究におけるメインの分析対

象は、利益や売上高などの数字ではなく文章で書かれた記述情報です。本研究では、近年発展の目覚ましい自然言語処理の技術を活用して、記述情報を定量的なデータに変換して実証分析をおこなっています。

3 教育内容

前任校では、簿記・会計の基礎的な教育に加えて、コーポレートファイナンス、コーポレートガバナンス、統計学、あるいは、情報システム設計・分析などといった多様な科目の教育に携わりました。とくに、情報システムに関連する講義では、情報系の先生と共同で、お手製のビジネスゲームを用いて経営上の意思決定を支援する情報システム構築・運用を指導しました。経営ビジネス学科では、同ビジネスゲームを「特別講義Ⅱ」で導入し、学生たちとゲームを楽しみながら学修を進める予定です。

ゼミナールの題材には、「日経STOCKリーグ」(運営 野村ホールディングス・日本経済新聞社)というコンテスト形式の金融・経済教育プログラムを導入しました。ゼミナールを受け持つのは今年が初めてなので、これから手探りで、学生たちと一緒に、「大洲ゼミ」らしさを模索しようと思います。これからも、研究・教育に精進します。どうか指導ご鞭撻のほどをよろしくお願ひ申し上げます。